季節のご挨拶　2025 年春（21 年目）

みなさま
あけましておめでとうございます。鈴木貴元です。2016 年以来の北京暮らしはこの夏から 10 年目に入ります。ここでの生活はまだ続きそうです。

経済のムードの話
　中国はコロナ禍が終わって 3 年目に入ります。中国では 22 年末に集団感染があり、そこから一気にコロナ禍が消えていき、23 年は、コロナ禍中に始まった EV ブームが続いたり、巣ごもりの反動で国内の旅行や外食が盛り上がったりと、上向きの年になりましたが、24 年は、そのブームが薄れ、些かどんよりとした年になりました。日本では物価上昇や不動産ブームなどがあり、景気の先行きには上向く期待もあったのかと思いますが、中国では年初から EV の値下げ競争、不動産の値下がりの加速などで先行きへの期待は段々と落ちていきました。中国は世界の経済の動きとズレていました。
　中国はコロナ禍の時には、マイナス成長に陥らず、国内では EC ブーム、国潮ブーム、EV ブーム、新エネブーム、サプライチェーンブームなどが経済を支え、世界から見て中国は「強い」と映ったところもありました。しかし、コロナ禍末期、22 年の上海ロックダウン、表面化した民間不動産デベロッパーの問題、米バイデン政権の対中姿勢の強硬化（デカップリング）などが起きると、世界はコロナ禍終了で「浮揚」、中国は＋6 カ月のコロナ禍継続で「異様（停滞的）」と映るようになり、ここから中国観がズレ始めたように思います。
　23 年は一時的に世界とシンクロしたように見えましたが、中国の巣ごもりの反動景気は期待より小さいものでした。盛り上がらなかった典型は独身の日でした。
　ざっと見て、中国の経済は、コロナ禍や米国政権からの影響で複雑な循環を描くようになっているように見えますが、その背後にある中長期の減速基調は鮮明で、24 年半ばという時期は、コロナ禍中の各種ブームの一巡、コロナ禍後の飲食・旅行ブームの回復一巡、不動産問題の構造的問題への懸念の高まりなど、諸々が重なり、最もムードが悪くなっていたと思います。
　そこから先のこの半年は、最悪は一旦脱したものの、ややこしかったです。つまり、夏場に株価や不動産価格の下落が強まり、これを受けて国慶節前に、政府が経済テコ入れを宣言。そこから年末まで段階的に政策発表。その中で最悪は一旦脱したものの、さらに先にはトランプ氏再登板が決まり、不透明感は別の形で残るといった状況でした。

つかれましたー
　私は中国の短期・長期の経済見通しを 2000 年頃からやっているのですが、そうした中で、この仕事の潮時は 2020 年頃かなと思っていました。というのも中国の高度成長が終わり、投資先としての関心が低下してくると思っていたからです。また

私自身が 55 歳となり、体力的に企業エコノミストのハードワークは無理になるのかなと思っていたからです。高成長の中で積み上がった、投資への過度の依存、拡大した格差、それによる消費不足などの経済課題などに、2020 年代は対処する時期と思っていましたから、ここへの研究は探求心をあるのですが、政府による企業のリードが制度化されている、きわめて大きな資産格差が制度によって固定されているような状況は、経済問題というよりも政治・制度の問題であるので、これを予測していくのは大変なことと思っていました。

一方、この時期から、米中逆転の懸念がリアルになってくると思っていました。米中名目 GDP 逆転よりも前に、中国の軍事支出から見た新鋭設備への置き換えが、西太平洋の米中の軍備の差を急速に縮めると予想されたからです（単純な理由は、中国の購買力平価 GDP が米国のそれを上回ると見らえたことと、米軍は展開が世界で分散している一方、中国軍は領土及び周辺に集中していること（練度の差は大きいが））。このことが予測から読み取れるようになったのは 2010 年代の前半。名目 GDP 日中逆転の直後頃からだったとおもいます。そしてこの懸念は、2015～16 年の米国駐在時代に、購買力平価 GDP で米中が逆転する中、米国の研究者も同じような懸念を持つようになっていたと思います。とはいえ、10 年前は、中国が斯様な経済力と軍事力を持つとしても、そのような力を行使しない、行使しないように関与できると思う方も多かったと思います。ともあれ、2020 年代の中国の研究はこちらに関心が傾くと思っていました。そして随分疲れそうだなと思っていました。

現実には 2020 年からコロナ禍が起き、米国は基軸通貨国としての強さを発揮する一方、中国はディスインフレに陥り、名目 GDP の米中逆転はほぼ考えられなくなりました。2010 年代半ばまでの予測では、2030 年代前半には中国と米国は一旦名目 GDP が並び、中国が上回り始めると予想されました（その後 20 年くらいで米国が再度中国を引き離し始めるとも）が、その後の予測は逆転シナリオが後退していきました。理由は、中国に通貨安・物価安の懸念が出たからです。ただし、米国の対中懸念は収まるどころかさらに高まりました。中国による実質的な逆転が方々に見えるようになったからです。この米中緊張は長く続くと思います。易しく言えば、米国は名目 GDP で世界一が続き、中国は購買力平価 GDP で世界一が続き、この状況を米国は「中国からの挑戦」、中国は「米国の衰退」と見やすいからです。また対立の中心は、金融と技術、仲間作り（外交）となることは見えています。金融は米国に分が圧倒的にありますが、トランプ氏も警戒するように中国や新興国はその代替を作ろうとしています。米国に世界の金融を預けていては安心できないというわけです。こうした対立は、技術にも、仲間作りにもあります。巻き込まれる残りの国にとってはこれをどう利用するかという問題になります。これは大きな問題です。

私はこの一部をエコノミストとしてみていくのでしょうが、全体像もある程度見ていかないといけないかと思っています。それで中国の中から世界が中国と米国をどう見ているかを見ているのですが、2024 年は世界中から中国に専門家や著名人が押し寄せ、何が起きているかを見るだけで疲れてしまう一年でした。最近私は北京がワシントン DC 化していると思っています。シンクタンクの動きが活発になり、SNS で

外交コミュニティーができてくる。米国のような有力シンクタンクの集積はまだかなと思いますが、世界の専門家が集まるフォーラムが頻繁に開かれる。好奇心を掻き立てられる一方、しんどくなりました。

北京に暮らして

2024 年の話題は「節約」に関係することが多かったですね。単純に見れば雇用や所得が伸びないから節約をするのでしょうが、そういう環境がどんどんできてきたのが、節約の循環を生んでいったように思います。2023 年は、コロナ禍終了でショッピングセンターの開店ラッシュがあり、ちょっと贅沢志向の飲食店が大量出店したり（ショッピングセンターのオープン数は通年の約 2 倍の約千件。店舗数を推定すると 20 万店（飲食はその 1/3 くらい）はこれだけでオープンしたと思われます。さらにオフィスビルなどでの出店再開を加えると相当な数です）、国内旅行の回復の中で民宿ブームが起きたりしました。しかし、2024 年は、ちょっと贅沢の特需は終了。飲食店は大量出店の反動に見舞われ、また、大量に開業した民宿もホテルの営業正常化で、立ち行かない状況が現れてきました。EC での物の購入も飽和しました。金額的にはそこそこ伸びているように見えますが、返品を差し引くと小幅な伸びになっていると思われます。製造業で過剰生産能力が問題になったのと同じで、非製造業でも過剰生産が問題になっていたのかと思います。そうした中、つぶれた飲食店の後にきた新しい飲食店などは、価格がずっと安いものとなりました。うちの会社の地下の飲食街で言えば、30～50 元が 15～40 元に単価がシフトした感じ。家の近所のショッピングセンターでは、158 元食べ放題とかの店がぐっと減って屋台コーナーが増えました。

一言で言えば「落ち着いた」ということなのでしょうが、コロナ禍前の４G ブーム、コロナ禍中の EC ブーム、、、。コロナ禍後はなんでしょう？体験消費とか、精神消費とか、氷雪経済とか、銀髪経済とかいろいろ言われていますが、次の宴にあう言葉が見つかりません。それで節約消費なのかあと思います。

「独身の日」が国慶節直後に始まったり、「メリークリスマス」がなく（新年と合併した形になっているようです）、12 月に入って年末年始のムードになったりしたのは、違和感が大きかったですね。独身の日は 1 カ月以上も続きましたが、正直ニュースらしいニュースにはなってなかったです。ライブコマースは当たり前。いつも安売りになってきたので、独身の日で買いだめする必要も減り、「ここで買わなきゃ」というのはなかったです。クリスマスは、アメリカ風に Happy Holidays なっていました。クリスマス前に香港に出張に行き、そこでは堂々と Merry Christmas があったのですが、本土では難しくなっていましたね（ハロウィンの時も仮装は北京の街中では禁止でした。ユニバーサルスタジオでは OK）。年末に上海に行き、久しぶりにカトリック教会でミサに出たのですが、他の宗教の方は入れないらしく、多くの方が柵の外から記念写真を撮っていました。脱線しましたが、クリスマスで消費するという雰囲気もあまり感じられませんでした。

個人的にちょっとうれしかったのは、北京に来て以来ずっと工事をしていた CBD

の新しいオフィス街の道路が通れるようになったことです。CBD の新しいオフィス街は、国貿ビル・ショッピングセンターと中央電視台（CCTV）、長安街に挟まれた場所で真ん中に北京で一番高い CITIC タワーがありますが、この地区の中の道路は私がこの近所に引っ越してきてからずっと通れず、周囲に渋滞を作っていました。それが年末になって開通し、少しだけ渋滞を緩和するようになりました。公共工事が後押しされたのかなと思いました。

いろいろ見たこと

2024 年もいろいろ出張に行ったり、旅行したりしましたが、秋以降は出張が多かったですとにかくイベントだらけになりました。政府系のシンクタンクが同じ日に同じ内容の。中央政府関連の大型博覧会やフォーラムが相次いだだけでなく、地方政府レベルのエクスポージャ、各国商工会議所主催の視察、スタートアップのピッチ大会などなど、フォーラムをやったりと、イベントが競争していました。

私自身は、マクロの調査、営業に関する産業の調査、北京の各国商工会議所の動き、中国の外交の動きなどを見ており、それに関していろんなところにいったり、イベントに出たりするのですが、部下を使ってもすべてのイベントに出られる訳もなく、アンテナとネットワークに頼る状況です。

会社の部下がヘルスケア事業で会社のピッチ大会に出ていることもあり、ヘルスケア関係の視察やフォーラムに参加することが多かったのですが、予想通りながらちょっと驚いたのは、地方の医薬・医療ベンチャーの動きでした。欧米の医薬メーカーは地方の隅々まで見てるんですね。四川省でバイオベンチャーを見たときには、創業間もないころ方ら英国領事館がその企業をフォローしており、英国、米国にラボを開設させているんです。当のベンチャーも世界販売を狙っており、それに見合った経営を考えている。また、海南島で医薬品メーカー主催のフォーラムに出たときには、主催メーカーの日本企業との提携が日本企業に対するセールスポイントになっていたようですが、海南島への医療企業や医療機関の進出は欧米企業がずっと早かったようです。他方、夏に北京で、米国商工会議所主催の上場企業の ESG の取り組みに関する協力セミナーに参加しましたが、主要なスピーチは、米国の金融機関に加えて、米エネルギー省の大使館駐在、中国のエネルギー局などでした。欧米の機関や企業はビジネスのためのネットワークが強いなと思いました。

話はズレますが、中国のヘルスケアビジネスは魅力があるなと思いました。中国は「高齢化」と言っても、日本で言えばまだ前期高齢化の状況で、「元気な老後」の状況です。日本では施術は昔からあってもなかなか普及していない「若返り」の治療などが中国では市場になりつつあり、技術はあっても普及していない日本に、中国のお金持ちの患者さんが殺到しているようです。日本は様々ないい技術があっても、いろんな理由で普及が遅れる。中国などの外の市場を取り込むことで、できなかった改革や技術の導入を進める。日中両者にプラスとなる協力・ビジネスができそうだなと感じました。

そこで言うと、これから強化される日中の交流はお互い補いあうものが見つかれば

と思います。中国にいて、今年はいろんな意味で日本はよく目立ったと感じます。よくないこともありましたが、いい方向で目立ったのは、日本の可愛いキャラクターです。「ちいかわ」とかは私にはよくわかりませんが、日本初のキャラクターが 100 円ショップの MINOSO や KKV のキラーコンテンツになり、またコンビニの内装になり、クレヨンしんちゃんがパッケージになったお菓子は数知れず。上海では、人民公園の地下にあった日本グッズの街が、上海一の繁華街の南京路に大集合。北京では、一番人気のショッピングセンターで、名探偵コナンとデジモンのイベントが同時に行われる。日本に対する印象は 2024 年最悪になったと、NPO のアンケートで発表されましたが（理由は福島の処理水問題への日本政府の対応らしいです）、日本という国と日本のモノは別なのかと感じました。日本では、中国に対するネガティブなイメージが強くなっていますが、冷静に考えてどうなのでしょう？一事を以て万事としていないか？これからの交流で差異も通じるところも発見してもらえればと思います。ちなみに米国は中国と 5 年間で 5 万人の若者交流を行うそうです。

交流では、できれば将来中国の専門家になる人が出てきてくれればありがたいです。いま日本の対中対策で不足しているのは人材です。欧米ですと、自国の大学・大学院に中国への期間留学コースがあるだけでなく、中国にも大学院があります。在中商工会議所にはインターン枠があります。在中企業には、両国関係を取り持つ役割となるガバメントリレーションズの部署があります。つまり、欧米の企業などには中国を専門としてキャリアアップする道があります。一方、日本の企業には、長い中国駐在というのはありますが、それは中国の専門家とは大きく違っています。先に、北京はワシントン DC 化のようなものが見られると書きましたが、これに対応できる日本企業はまだ少ないです。日本の中国学者はどんどん減っています。交流を通して中国をやっていこうと考えてくれる人が出てきてくれることを祈ります。

冷蔵庫とコップラベル

弾丸旅行などが流行っているといわれる中国の旅行スタイルですが、コロナ禍後の最大の特徴はお土産がコンパクトになったことです。みんな EC で買えますから爆買いは「限定品」に限られてきます。国内旅行で最も人気なのは明らかに「氷箱貼」です。冷蔵庫に貼る磁石です。一個 10 元から 100 元くらいまで。多くが浙江省か広東省で作られているため、地域が違っていても同じような雰囲気の磁石が見られます。またこれがシリーズ化しているように見え、これを集める人が増えています。磁石は四角い磁石に観光地の写真を貼り付けたものが原型でしたが、最近は立体化やキャラクターのついたものなどいろいろあります。個人的に昨年入手したものでよかったのは、揚州のものです。揚州は江沢民さんの出身地で、近代以前は外国貿易で栄えた地です。螺鈿などの伝統工芸、庭園美術などでも有名です。ここの磁石は、書道の芸術的なものや、古典の文章をデザインしたものなど、ほかの地域よりもバリエーションが広くよかったです。専門店も街中にあるほどです。あと、旅行先といえば、たくさん歩いてのどが渇くわけですが、そこに出てくるのが「お茶」。どこでもだいたい 20～30 元ですが、プラスチックコップにご当地の名前が書道で書かれた紙ラベルが

貼ってあるもの。これが旅行定番になっています。その中でよかったのは、貴州省のコップ。少しだけ特別料金を取るのですが、少数民族の竹編みの装飾がついたものがお気に入りでした。多くの旅行者は、地名の書いてあるコップを名所のある方に向けながら自撮りをする。自分＋お土産＋地名が一枚に納まり、非常にわかりやすい映える写真になるようです。

ただ、これで旅行をしますと、お土産代はせいぜい 150 元くらいにかなりません。ほかはみんな EC。でも旅行が終わって旅行に行った先の食べ物をお土産として買う人はあまりいないと思います。お土産屋さん受難の時代だなと思います。そこで言えば、いつか新聞の記事で日本のお土産を見習え、というのがありました。日本に行ったとは、なんだかんだたくさんお土産を買ってくる（昨今はお土産をトランクに詰めて、「こんなの買ってきました」というのも SNS で見られます）。今は EC でもかなり色々買えるのに思わず手を出して買ってしまう。日本はそういう魅力にあふれていると中国の方には思われているようです。

中国のハイテク

2024 年いろいろ見たハイテクで言えば、自動運転車、自動港湾、C919、生成 AI などが印象的でした。自動運転車は実験規模が大きく、自動車が少ない郊外ではほぼ実用できるかなと思いました。ただ中国では、車と人の分離が徹底しており、日本よりもずっと実験環境が良いかなと思います。自動港湾は、上海市郊外の羊山港や河北省の滄州港などを見ましたが、上海の自動港湾は年間取扱量が 500 万 TEU。東京・横浜港に匹敵する規模。100m ちょっとの高さのタワーから港全体を見ましたが、東京・横浜港規模なのに人がほとんど見られない。これは年間 5,000 万 TEU を扱う上海港だからこそこのような実装ができるのかと思いますが、日本はこういう状況に対応できないと、いずれ日本に寄港する大型船はなくなり、上海、プサン、高雄などからのフィーダー輸送しかなくなってしまうのではないかと懸念しました。C919 は中国国産ジェット機です。離陸前のエンジン音はうるさいですが、乗り心地は悪くないです。席のピッチが広いので座りやすいです。欠点は、荷物を入れるところがボーイングなどに比べて低い位置にあるので、降機時に狭さを感じます。昨今の中国の航空会社は対応がとても丁寧なのでそれも含めていいですね。米国の型式認証は受けていないので、海外で飛ぶのはかなり制限されるみたいですが、中国国内はこちらの普及が進むのかと思います。生成 AI は、中国では広告によく使われるようになってますね。ただ、やっぱり気持ち悪いですね。あと、中国では NG ワードや NG 質問項目があるので、私のような仕事では使いにくいです。海外 VPN でしか見られない Web サイトに係る話題はそもそもできないですからね。

いろいろ見ていますと、規模の大きさでできる技術というのはありますね。そういえば、2024 年には全自動工場も話題になりましたね。日本はこういう動きについていけるのでしょうか？少なくともこういう動きは見てないといけないですね。中国の大きな博覧会は、モーターショー、広州交易会、輸入博、サービス貿易博、中国・アセアン博、中国・南アジア博、ビッグデータ博などたくさんあります。中国は実験

の宝庫、交流の場です。2025 年もできるだけ見ていきたいです。

中国に関する議論

中国の経済問題では「不動産」のことが常々言われます。投機の過熱を抑える政策が行われて、そこから 3 年。不動産デベロッパーの状況は解決していませんが、ここにきて販売が持ち直してきました。元から開発すべきでなかった物件はともかく、まだ 1 億人以上増加すると見られる都市人口を考えれば、不動産問題は山場を越えつつあるかと思います。また、不動産と一緒に問題とされる「地方政府」と「地方金融機関」についても、債務の借り換えや資本増強などが打ち出され、ひとまず改善の方向性は築かれました。ただ、この一連の問題は、物理的に不良化する物件が出てくるので、これを買い入れて処理するもう一段の処置が必要みたいです。

それより厳しそうなのは、「過剰設備」です。この中国の中での議論を聞いていると、中国の外とはあまりに状況が違うので驚きます。外との大きな違いは、「中国は市場が巨大なので、設備投資の最適規模を推し量るのは難しく、素早く大規模な投資を行い、シェア競争に勝つという戦略が最適になりやすい」ということです。今年は EV や電池などの過剰生産が話題になりましたが、これは中国の状況からすれば非常に典型的なケースで、設備機械の生産を急速に増やすことで大幅なコストダウンも図られてしまうという副次効果も見られます。海外から見れば中国のこうした状況は脅威であり、中国企業は補助金漬けというような批判も出ていますが、米国も産業政策をやるような中では、中国が外からの議論を受け付けるのは難しいかと思います。一方、資本集約産業で過剰設備が起こることは不安定を増長しやすい。それが国際市場に参入してくれば商品・製品の市況を悪化させやすくなる。このあたりの議論は国際的にもあまり丁寧にされていないですね。どこかで投資の調整は来るはずなのですが、、。

今後気になるのは、ディスインフレと為替レートですね。製造業もサービス業も過剰供給気味で価格が上がりにくいです。価格競争が抑えられ、一定の値上げが組み込まれていればいいのですが、自動車、家電、食品、住宅などを見ているとマイナスにならないとしても、インフレ率は上がりにくいです。また中国の場合、GDP の 4 割が投資で、投資財は国際市況が上がらない限り、価格は下がりやすくなっているので、投資財価格を反映しやすい GDP デフレータは、CPI のインフレ率よりも上がりにくくなっています。こうした中、政府はインフレ率を上げるよう金融を緩和してきていますが、為替は足元 2008 年初め以来の元安水準まで下がっており、金融を緩和しすぎることには警戒があります。日本化ともいわれることがあるディスインフレ的な状況。どうなるのでしょうか？米国の利下げも遠のいていますので。

久々の日本

今年は中国転勤以来初めて日本に 1 カ月帰りました。日本は変わってましたね。東京の商業地はどこでも英語が通じるようになったみたいでしたし、電車がダイヤ通りに動かなくなり、トラブルがあるのは当たり前のようになってくるようなのを

見るにつけ、普通の国になって来たかなと思いました。ただ、いつまで日本は日本を維持できるのでしょうか？見ていていろいろ心配になりました。複雑化した都市開発、ノスタルジックだが誰が受け継ぐかわからない地方の風景、こだわりすぎでサドンデスになりそうな飲食店文化など、ここ数十年ちゃんと投資をしてこなかったことがよく見えました。災害が増えており、人命や経済・社会の持続性を考えれば、もう少し都市の整備にお金をかけてもよさそうですが、もうそこへの余裕はないのですね。どこに行っても手作り感、できることをやっている感が伝わってきて、別の言い方をすれば文化や伝統の継続性への意欲というのが感じにくかったように思います。観光立国化、中国からもインバウンドを呼ぶという中では、日本という国をどう後世に残すのは考えさせられました。

ともあれ、日本ではいろいろな方に会いました。中国に関して言えば、11 月末にノービザが解禁されましたが、往来が弱まっている間に中国のなまの情報なかなか日本に伝わってなかったのですね。また、日本では「米中関係」というと「米 or 中」のような印象になっていると改めて感じました。北京にいて米中関係で「米 or 中」と考えるのは状況的にほぼあり得えず、「それぞれとどううまくやるのか」、「どこの部分でうまくやるのか」というのが北京にいる外国人の考え方であり、それは米国大使館・企業でさえも、中国と協力できるところは協力しておくという機会主義的なところがあるのだが、日本ではそういうのは「不義」と映るのか。どちらかをきっぱり選択しなければならない（それで米国を選択）ような雰囲気を感じました。

中国への企業進出

中国への企業進出というと 2024 年は話題的には「撤退」の話が多かったですね。実際弁護士事務所などはそれが一番の相談事。今年は米国の弁護士事務所が 10 社以上撤退するというので、それはそれで本当のことです。とはいえ、中国に挑戦する企業が減ったわけではありません。製造業は習近平政権発足当時の半分くらいまで減りました。しかし、非製造業はその逆で 5 倍近く増えました。年間約 5 万件です。中小企業や研究機関などが多く、1 社平均 10 人と少なめに見積もっても 50 万人の雇用をグロスで生んでいます。しかも、先述のように内陸奥地にも研究開発企業などが進出しており、1 件当たりの投資金額は小さいが、むしろ中国投資は活発になっているように見えます。こないだも米国商会の案内で同僚がインテルの研究所を見学してきましたが、技術移転に関する制限はちゃんと守りながらも、巨大な投資を続けていました。世界全体をリソースとして考えれば、各国の規制に従いながら、リソースを再配分するだけの話と言えなくもないので、米国政府がどうであろうとうまく調整しているのかと実感させられたようです。

それに北京のユニバーサルスタジオとか上海のディズニーランド、中国中にある米国系のホテル何かに行くと、「本当に米中は対立しているの？」と感じさせられます。

以前も書いたかもしれませんが、中国にある日本料理屋は約 10 万（日本人によるものはその 3%程度）。キャラクタービジネスは圧倒的に日本と米国が強く、特にデ

ザインなどのタイアップは圧倒的に日本が強い。でも、リアルの日本人の顔は見えなくなってきています。国際会議には欧米人がこぞって出てくるのに日本人は（ついこないだまではビザの問題もありましたが）「こわいかも」と言ってなかなかきてくれないようです。まあ、日本経済がデフレ体質から脱して、名目成長率 oriented に戻り、わざわざ外国に行く必要性は減っているかもしれません。中国はすぐ横なので日本からコントロール（把握）できるという古い意識もまだ強いようです。しかし、2018、9 年のころに「深圳詣で」が流行ったように中国からの新しいビジネスの流れはまだ脈々といきています。最新の新ビジネスは、GX 系、BtoB 系が多いので目立ちにくいですが、行政等の手続きがほぼデジタル化し（しかも入力ミスの問題などは全く出ていない）、世界の最新工場と認定される工場の 4 割以上が中国という状況で、これを見ない、研究しない、見習わないというのは非常にもったいないです。ドイツ企業を筆頭にそれを取りに来ているのが欧米企業です。貪欲に学びあっている中国と欧米の中に日本も来てほしいですね（ただ、Look、Learn、Leave の 3 L にはならないでほしいですが）。

これからの仕事について

2025 年は、中国のスタッフに産業調査や社内対応を一段と任せ、私自身はこちらのエコノミストや学者からのヒアリングに集中できるようになればと思っています。中国の政策決定は習近平政権 3 期になって、国務院の役割が共産党に戻ってその過程が些かわかりにくくなり、政府エコノミストの声を聞くのが大事になったように思います。これは、中国の政策がより中国的になることからも、その「中国的」を十分理解しないといけなくなっており、それには中国の方から直接説明されるのがよくなっていると思われます。他方、いろんなことが北京で起きますので、たくさんの人と合わないといけないかなと思います。

2025 年のキーワードを早くみつけたいですね。国内経済は消費を盛り上げること、国外関係はトランプ再登板の時代をうまく対処することが、ぼんやりとした目ぼしですが、これらを象徴する何かはまだこれからですね。2024 年は「EV」、「半導体」、「AI」などによる「中国技術・ブランドの台頭と米中技術・安保摩擦」とでも言えたかとおもいますが、2025 年もこれが続くのか。ここ 1 、 2 カ月で見えるのでしょうか。

ともあれ、もう 55 歳なので定年を考える時期となりました。何をするか真剣に考えないといけないですね。あと 5 年は丸紅中国さんなのかなと思いつつ、あまりにも忙しいのでとりあえずもう少し落ち着きたいと思います。

今年の春節は中国で過ごします（正確には香港ですが）。次の日本帰国はシンクタンクの研究会などがあれば春に一度と思っていますが、おそらく 4～6 月のどこか。そのあとは 8 月に大阪万博かなと思っています。あと状況が良ければ一度ワシントン DC に行ってこようと思っています。

2025 年もよろしくお願いします。
会社で某別商社系のコンビニのカニカマおにぎり 158 円（1 元＝20 円換算）を食べながら、1 週間だけ販売された塩おむすびがもう一度販売されないかなと願いつつ。

鈴木貴元

北京市朝陽区西大望路 3 号　藍保国際公寓 C903（自宅）
北京市朝陽区東三環中路 1 号　環球金融中心西楼 22 層　丸紅（中国）有限公司（会社）